



# 青春の歌

## 無名性の光

穂村 弘  
ほむら ひろし

青春とはどういう時間だろう。

雲を雲と呼びて止まりし友よりも自転車一台分先にゐる

澤村 斉美  
さわむら まさみ

友だちが「雲」と叫んで自転車を止めた。美しい飛行機雲か、巨大な入道雲か、それとも鮮やかな夕焼け雲を見つけたのだろうか。その声につられてブレーキをかけたへ私へは友だちよりも「自転車一台分」だけ先に止まって、二人で空を見上げている。

ただ、それだけのことなのに、私はなんともいえない眩しさを感じた。作中の「友」もへ私へもまだ若く、たぶん学生なのだろう。例えば、通勤途中の会社員が「雲」と叫んで立ち止まる、というのは想像しにくい。

「雲を雲と呼びて」も魅力的だが、この短歌のポイントは「自転車一台分」にあると思う。この言葉がわざわざここに置かれたのはどうしてだろう。この時、空を見上げた「友」とへ私への間にあるものは「自転車一台分」の距離に過ぎない。けれども、ぴったり並んでいるわけではない。「友」とへ私へはそれぞれの場所から同じ雲を見上げているのだ。その微妙な距離感が、二人の存在や人生は決して交換することができない、という感覚を浮かび上がらせる。

その一方で、この時点での二人が社会的には交換可能な存在であることも事実だろう。大人の目から見れば、どちらをアルバイトに採用してもそんなに変わらない。

「友」と「私」が自分だけの何かをつかむのは、かけがえのない何者かになるのは、もう少し先のことなのだ。

そんな青春の無名者として、二人は同じような自転車から同じように雲を見上げている。制服も同じかもしれない。けれど、それは今だけのこと。二人の距離は今が人生のなかで最も近く、この後は時間の流れとともに、それぞれの人生を進んでゆくことになる。卒業、進学、恋愛、就職……、「自転車一台分」だった距離はどんどん広がって、手の届かないものになってゆくだろう。同じ空の同じ雲を見上げながら、彼らは無意識のうちにそのことを感じていると思う。

未来の運命に対するこの予感こそが、「自転車一台分」に象徴される「今」「ここ」の輝きを支えている。私が感じた眩しさの正体はそれだろう。今だけの無名性の光、私は青春という時間の本質をこの点に見たい。

「うごく」「いや動かない」「いや」真夜中に二人そろって  
 まりもを見張る  
 伴風花

「まりもを見張る」という行為には独特の若さがある。

「雲」を「雲」と呼ぶのにも通じる非生産性というか、

通勤途中の会社員が「雲」と叫んで立ち止まらないように、大の大人は本気でまりもを見張ったりもしないだろう。「うごく」「いや動かない」「いや」という会話は友だちというよりは恋人同士のものかもしれない。まりもが動くか動かないかは大きな問題ではない。冗談めいたやり取りの中で二人が本当に確かめているのは、「今」という時間の大切さだ。いつまでこうしてられるかは誰にもわからない。仮にずっと一緒だとしても、就職して結婚して子どもができたなら、もうこのままの二人ではいられないだろう。真夜中にまりもを見張っていられるのは今だけ。「うごく」「いや動かない」「いや」というやり取りは、青春の光を少しでも自分たちの上に留めておきたいという無意識の現れだと思う。「自転車一台」の例と同様に、ささやかで他愛ないからこそ、かけがえないものなのだ。

だが、時の流れを止めることは誰にもできない。青春はいつか終わる。ここまでに見てきた短歌も、作者がそ

のことを知っているからこそ作られたのだろう。

互いしか知らぬジョークで笑い合うふたりに部屋を貸して下さい

野口あや子

「互いしか知らぬジョークで笑い合う」からは「うごく」「いや動かない」「いや」のやり取りが連想される。二人はいつまでもそんな世界の住人になりたいのだろう。

そこから「ふたりに部屋を貸して下さい」への展開には、青春の無名性を楽しんでいる現在をそのまま未来に持ち込みたいという願いを感じる。でも、部屋を借りるのは大人への第一歩。そのためにはさまざまな手続きと証明が必要になる。社会的に完全に無名の存在のまま部屋を借りることは不可能なのだ。

時計の針が進み、それぞれの人生の中で大人になった時、人は青春の無名性の輝きを当時のように詠うことはできなくなる。「眩しい今」が「眩しかった過去」へと変わっていく。そのことを、例えば次のような歌から読み取ることができる。

椅子にもたれ椅子を回せる数秒のあらば 思えよあの夏のわれら

永田紅

かつての恋人か友人への呼びかけだろう。連作の中で前後に置かれた「実業に就きたる君の日常に鳥は飛んではこないのだろう」「そしてそのままに椅子より立ちあがり午後の会議へ出てゆくべし」から状況がわかる。青春を共に過ごした君は今、ネクタイを締めた会社員になっている。そこで忙しく会議に出る日々を送っているのだろう。二人の道はこんなにも分かれてしまった。だからこそ、立ち上がって会議に向かう前のほんの「数秒」でいいから「あの夏のわれら」を思い出してほしい、とへ私へ願っているのだ。若かった自分たちがあまりにも遠く眩しい。

十数年前、学生だった作者は次のように詠っていた。

どこに行けば君に会えるということがない風の昼橋が眩しい

永田紅

ああ君が遠いよ月夜 下敷きを挟んだままのノート硬くて

同

これらの恋歌に見られる「君」の遠きは、「思えよあの夏のわれら」の遠きとは全く異質の輝きをたたえている。「どこに行けば君に会えるということがない」かつての状況に対して、むしろ今は勤め先の会社に行けば「君」がいることはわかっている。その分、物理的な距離は近いともいえる。訪ねて行きさえすれば、昼休みに一緒に食事に出て穏やかに昔話をすることもできるだろう。けれど、目の前の君はネクタイを締め、へ私への靴にもヒールがある。自由だった「あの夏のわれら」はもうどこにもいないのだ。

「思えよあの夏のわれら」の歌は『ぼんやりしているうちに』という歌集に収められている。「ぼんやりしているうちに」時の流れによってみんなばらばらになってしまった、という感慨がこのタイトルには込められているのではないか。

十代にもどることはもうできないがもどらなくていい  
濃い夏の影

こしま  
小島なお

青春という人生の春は過ぎて夏が来た。無名の時を経

て、へ私へは自分だけの何かをつかみかけ、かけがえない何者かになろうとしている。友だちと離れて一人で夏の光の中を歩きながら、ふと気づくと、足元の影が濃い。

澤村斉美 P 264上3

一九七九― 岐阜県に生まれた。歌集に『夏鴉』などがある。

伴風花 P 265上17

一九七八― 東京都に生まれた。歌集に『イチゴフェア』などがある。

野口あや子 P 266上3

一九八七― 岐阜県に生まれた。歌集に『くびすじの欠片』などがある。

永田紅 P 266下2

一九七五― 滋賀県に生まれた。歌集に『日輪』などがある。

小島なお P 267上17

一九八六― 東京都に生まれた。歌集に『乱反射』などがある。



### 穂村弘 「一九六二」

北海道に生まれた。歌人。

歌集に『シンジケート』『手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』『水中翼船炎上中』、短歌入門書に『はじめての短歌』ほか、詩集、エッセイ集、絵本、翻訳など著書多数。

《出典》本書のために書きおろしたものである。

